

松谷松下 2 遺跡の土壙墓と出土人骨の人類学的検討

石守 晃

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐伯史子、奈良貴史

新潟医療福祉大学自然人類学研究所

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1 はじめに | 3 松谷松下 2 遺跡出土人骨の人類学的報告 |
| 2 松谷松下 2 遺跡と 1 号土坑 | 4 まとめ |

— 要 旨 —

群馬県北西部の吾妻郡東吾妻町大字松谷に所在する松谷松下 2 遺跡は上信自動車道の一部を構成する西吾妻バイパスの建設に伴い発掘調査が行われ、令和 3 年に発掘調査報告書も上梓されている。ここに報告された土壙墓である 1 号土坑からは人骨が出土していたが、諸般の事情からその鑑定は留保され、鑑定所見は掲載されないままであった。

1 号土坑は北頭位横臥屈葬で埋葬された、所謂中世土壙墓であったが、古寛永の寛永通宝を出土したことから近世前期の所産として把握された。1 号土坑は中世土壙墓の中で再末期に属する時期のものである。

出土人骨の遺存状態は不良であったが、頭骨片、四肢骨片が多数確認された。頭骨や歯牙、四肢骨を鑑定した結果、1 号土坑出土人骨は 18 歳から壮年期の女性のもものと推定された。

キーワード

対象時代 江戸時代
対象地域 群馬県吾妻郡東吾妻町
研究対象 土坑墓 人骨

1 はじめに

あがつま

群馬県吾妻郡東吾妻町大字松谷字久々戸に所在する松谷松下2遺跡で確認、調査された1号土坑(土壌墓)の調査所見は既に報告されているが((公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2021)、諸般の事情から出土人骨については報告されなかった。このため本稿は、この出土人骨の鑑定所見の報告を主たる目的とするものである。尚、遺構、遺物については石守が、出土人骨の鑑定所見は佐伯・奈良が執筆し、文責はそれぞれが担う。

2 松谷松下2遺跡と1号土坑

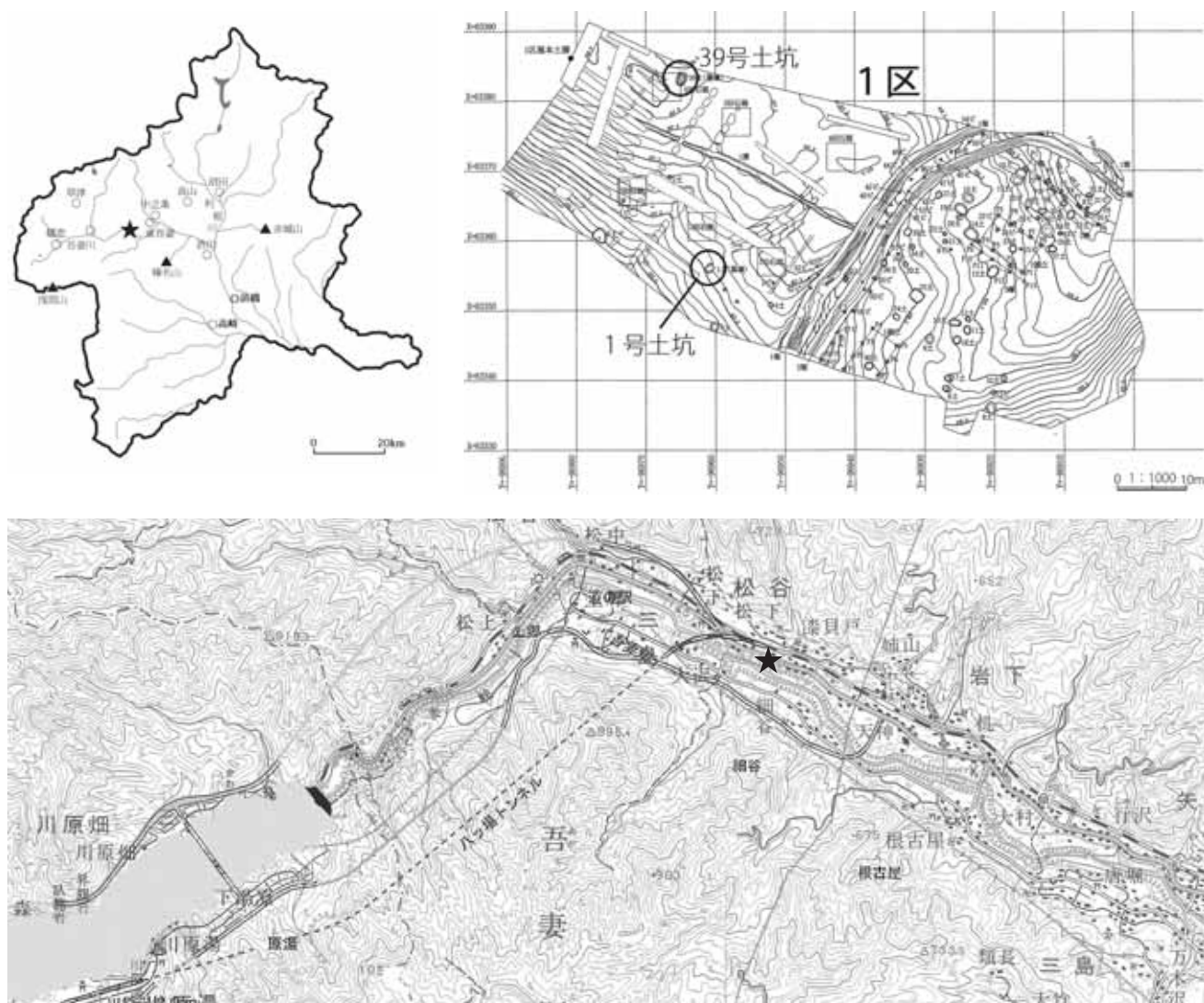
① 松谷松下2遺跡

上信国境鳥井峠に源を発する吾妻川は、その中流域で八ッ場ダム(吾妻郡長野原町)に堰き止められ、これを越えと国指定名勝吾妻峡を北東方向に流下し、河岸段丘で開けた地域に入ると走行を南東方向に転じる。その転換点から1.5km程下流の吾妻川左岸段丘上に松谷松下2

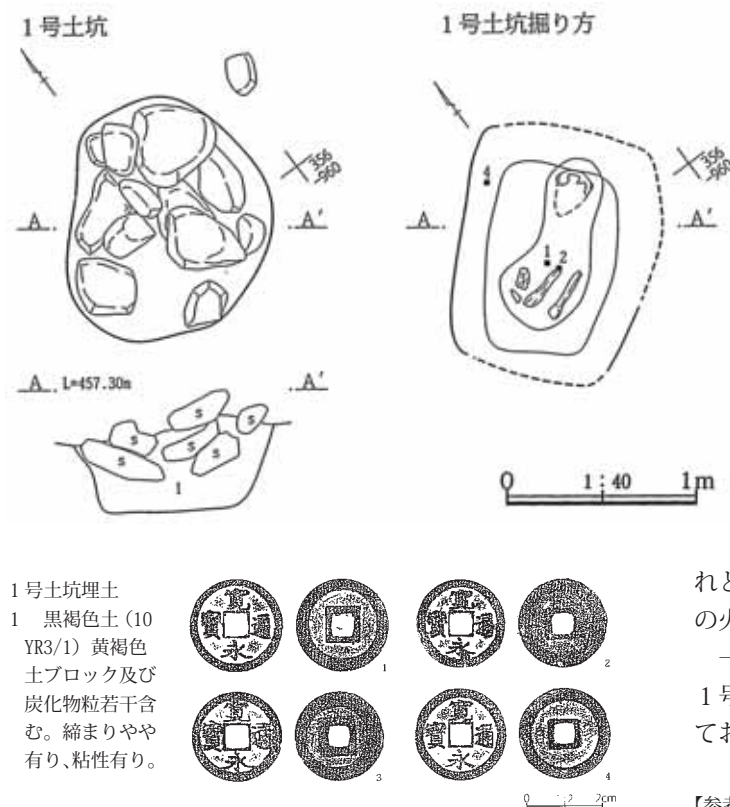
遺跡は在るが、同遺跡の南東側は北方から吾妻川に流入する久々土沢に区切られている。

さて松谷松下2遺跡は縄文時代と古墳時代以降の時期の複合遺跡であり、関越自動車道渋川インターチェンジ(群馬県)と上信道東部湯の丸インターチェンジをつなぐ広域バイパスである上信自動車道の中程に在って、同自動車道の一部を成す西吾妻バイパスの建設事業に伴い、令和元(2019)年10月1日から同年11月30日にかけて発掘調査を実施した遺跡である。調査した遺構には中世後期の城館址、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災に伴う復旧坑群などがあるが、この中に近世前期と判断された2基の墓壇が含まれていた。

2基の墓壇は、吾妻川に沿いに設定された調査区(1区)の南西寄りの1号土坑と北西寄りの39号土坑である。1号土坑は人骨が出土した土壌墓であり、39号土坑は火葬坑である。1号土坑については後述するが、39号土坑は径1.95×1.78m、深さ1.03mを測る箱形大型の土坑で



第1図 松谷松下2遺跡位置図(左上 1:20万 下 1:5万)及び1区遺構分布図(右上)



第2図 1号土坑遺構図と出土銭貨

ある。人骨の出土はないが、底面から30～40cmまでは良く焼けており、一面に敷き詰められたかのように炭化物が出土している。

② 1号土坑

1号土坑は主軸をN45°に取る隅丸長方形プランの土坑で長径134cm、短径105cm、底部の長径100cm、短径68cm、深さ48cmを測る。本土坑は黒褐色土で埋没するが、その上位から長径24～44cmを測る比較的大型の礫12個ほどが出土しており、これらの礫で墓壇上面は被覆されていたものと判断されている。

さて、1号土坑出土人骨は北頭位横伏屈葬で埋葬されていた。顔の向きは特定できないが、恐らく西向きであろうと思われる。また副葬品に古寛永の寛永通宝4枚が出土するため、本土坑は近世前期の所産として把握されたのである。

③ 中世土墳墓について

1号土坑は北頭位横臥屈葬という埋葬状態から推して、所謂中世土墳墓に分類される。次にこの中世土墳墓について若干を記す。

群馬県内の律令期以降の土墳墓は、律令期は伸展葬、中世は北頭位西向横伏屈葬、近世は箱棺や棺桶による座葬と認識される。

このうち中世土墳墓には棺を表裏或いは天地を取り違えた事例もあるが、使用された棺は、融通念仏縁起絵巻下巻第七段に見られる直方体の箱棺もの(第3図左)や、前橋市鳥羽遺跡G区1号土墳墓の土層観察から想定された曲げ物の場合もある(第3図右)。

またその初源は上述の融通念仏縁起絵巻の成立した14世紀末まで遡る。同時期の遺構は不明瞭だが、伊勢崎市中植木沓町田遺跡では14世紀中葉～15世紀の火葬土坑(茶毘所、火葬跡)があり、同遺跡の土墳墓はこれと同時期かやや遅れるという所見が示されている。但し前橋市鳥羽遺跡G区5号墓などの火葬人骨の出土状態が土墳墓のそれと近似するため、下植木沓町田遺跡の土葬墓も同遺跡の火葬土坑と同時期に遡る可能性がある。

一方中世土墳墓の下限は、本稿で扱う松谷松下2遺跡1号土坑のように寛永通宝の副葬事例が以前から知られており、近世(前期)に下ることが知られている。

【参考文献】

石守晃1988『所謂中世土墳墓について』『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団pp533-540

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『書上下吉祥寺遺跡 書上上原之城遺跡 上植木沓町田遺跡』pp323-331

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『鳥羽遺跡 L・M・N・O区』pp421-423

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『五日牛清水田遺跡』p523

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(2022)『松谷松下2遺跡』

小松茂美編『日本の絵巻 続21(融通念仏縁起)』1992

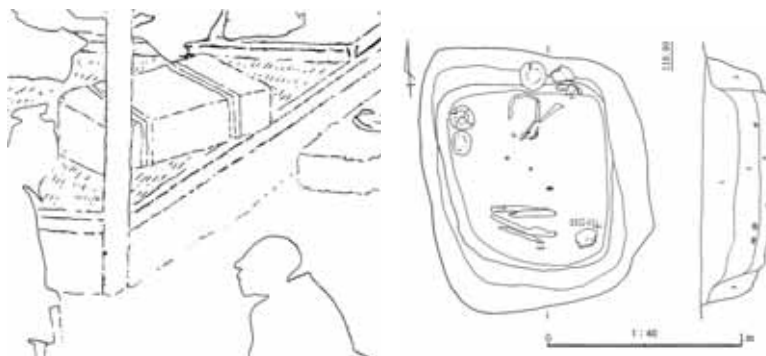
楠崎修一郎2007『群馬県出土中世火葬遺構』『研究紀要25』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団pp101-120

【図版】

第1図左上：石守作図／右上：(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022第18図に石守加筆／下：国土地理院五万一地形図「草津」(H11)・「中之条」(H10)に石守加筆

第2図 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022第28図に石守加筆

第3図 左：石守1983作図／右：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990 Fig.534に石守加筆



第3図 中世の棺と土墳墓及び火葬土坑

3 松谷松下2遺跡出土人骨の人類学的報告

① はじめに

2021年の群馬県東吾妻町松谷松下2遺跡の発掘調査によって近世に相当すると思われる土坑から人骨が出土した。本稿はそれらの人類学的報告である。

② 方法

人骨の計測はMartin and Saller(1957)と馬場(1991)に、歯の計測は藤田(1949)に従った。歯冠計測値は表1に示す。年齢推定は歯の形成・萌出状況(Ubelaker, 1999)、歯の咬耗度(Molnar, 1971)、四肢骨骨端部の癒合状況(Buikstra and Ubelaker, 1994)に基づいた。性別判定はBuikstra and Ubelaker(1994)に拠った。歯の咬耗度はMolnar(1971)の分類に従い8段階に分類した。歯の齲蝕はWHO(2013)の基準に従いC 1～C 4の4段階に分類した。また、山本(1988)の基準に従いエナメル質減形成の有無を確認した。

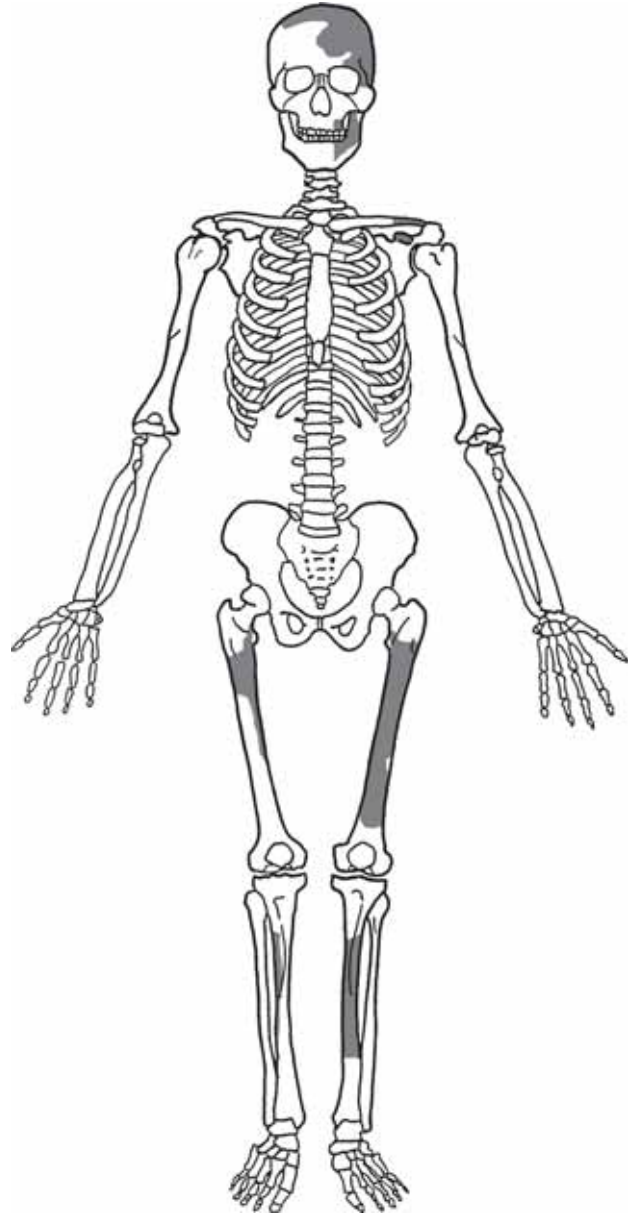
同定できた歯は歯式に記載した。歯式の水平線は上下顎の境界、垂直線は左右の境界、左右はそれぞれ個体の右側と左側を表す。歯式の上下の数字はMolnar(1971)の咬耗度を示す。

③ 人骨所見

【1号土坑】(写真)

遺存状況：骨の遺存状態は不良であり、頭骨片、四肢骨片が多数存在する。頭骨において、顔面部の大部分が欠損しており左上顎骨の臼歯部と下顎骨左臼歯部から下顎枝、頭蓋冠では前頭骨左眼窩上部、左頭頂骨、左側頭骨、後頭骨、上顎骨の一部が遺存する。四肢骨では、左鎖骨遠位部、左肩甲骨烏口突起、左右大腿骨骨幹部、左右脛骨骨幹部が確認される。

同定できた部位は第4図に黒塗り部分で示す。同定できた歯は次の歯式のとおりである。その他に上下左右不明の矮小歯が1個確認できる。重複した部位が認められ



第4図 出土人骨遺存状況図

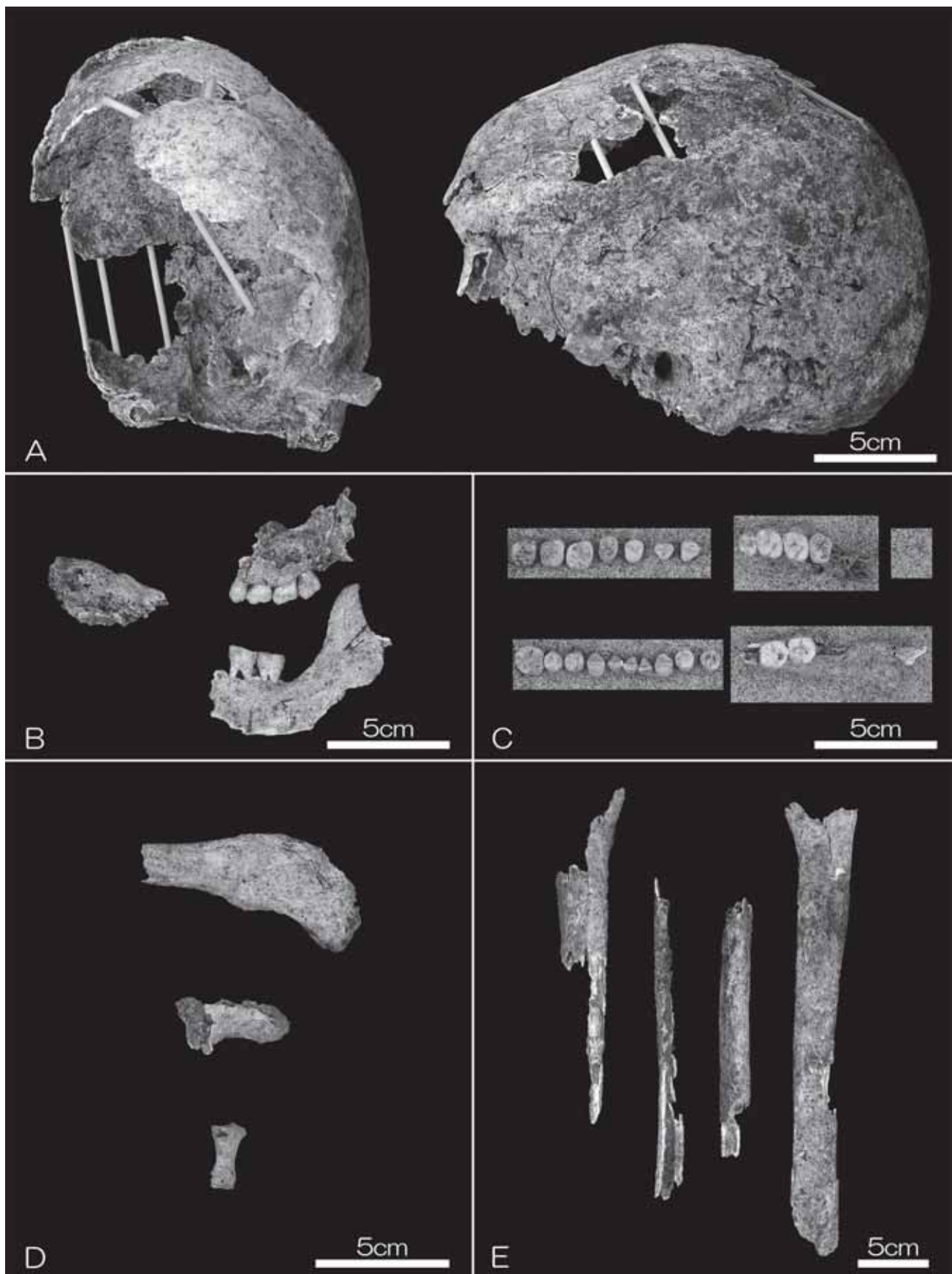
2	3	3	2	2					3	2	3	3	2	
M3	M2	M1	P2	P1					I2	C	P2	M1	M2	M3
		M1	P2	P1	C	I1	I1 I2 C P1 P2 M1 M2							
		3	3	3	3	3	3 3 3 3 3 3 3							

ないので1個体分埋葬されたものと思われる。

年齢：上顎左右第三大臼歯が萌出完了していることから18歳以上と推定される。さらに確認できる頭頂部の矢状縫合が内・外板とも癒合していないことから熟・老年段階には達していないと思われる。また、咬耗も象牙質が限局的に見られる程度であることから比較的若い個体だ

と思われる。以上のことより年齢は18歳から壮年期前半程度と推定される。

性別：前頭骨の前頭結節が確認でき、後頭骨外後頭隆起は未発達である。さらに左右の大腿骨骨幹部ならびに脛骨の骨幹部の華奢さは女性を想起させる。以上のことから女性と推定される。



A 左：頭蓋前面観 右：頭蓋左側面観 B 左：右側頭骨錐体部 右上：左上顎骨 右下：下顎骨左半部 C 上段 左：上顎の遊離歯咬合面 中：上顎植立歯咬合面 右：矮小歯咬合面 下段 左：下顎の遊離歯咬合面 右：下顎植立歯咬合面 D 上：左鎖骨 肩峰端 中：左肩甲骨烏口突起 下：手の中節骨 E 左から、右大腿骨・右脛骨・左脛骨・左大腿骨

表 1 歯冠計測値(mm)		1号土坑墓			
		右側		左側	
		近遠心径	唇・頬舌径	近遠心径	唇・頬舌径
【永久歯】	上顎 中切歯(I1)	—	—	—	—
	側切歯(I2)	—	—	7.86	7.29
	犬歯(C)	—	—	7.64	9.26
	第一小白歯(P1)	7.55	9.85	—	—
	第二小白歯(P2)	7.54	9.87	7.20	9.54
	第一大臼歯(M1)	10.54	11.65	10.04	11.30
	第二大臼歯(M2)	10.66	11.82	9.75	11.90
	第三大臼歯(M3)	10.14	11.11	9.33	11.17
	下顎 中切歯(I1)	5.67	6.45	—	—
	側切歯(I2)	6.10	6.67	—	—
	犬歯(C)	7.05	8.95	—	—
	第一小白歯(P1)	7.46	8.08	—	—
	第二小白歯(P2)	7.87	8.48	—	—
	第一大臼歯(M1)	11.76	12.05	11.47	11.59
	第二大臼歯(M2)	—	—	11.00	11.30
	第三大臼歯(M3)	—	—	10.89	8.76

—：該当歯が存在しないもの

特記事項：左下顎第1大臼歯の咬合面にC2、同第2大臼歯遠心面にC2程度の齲蝕が認められる。エナメル質減形成が、上下の遺存する犬歯に認められる。左大腿骨の骨幹部は、粗線が発達せず、内外側方向に扁平である、保存状態が不良で骨表面が剥落しているため推定値だが、骨体中央矢状径26.5mm、骨体中央横径27.8mm、骨体中央断面示数は95.3と現代日本人の平均101.1と比較しても小さい。

4 まとめ

- ①今回の発掘調査によって近世に相当すると思われる土坑から人骨が1個体出土した。
- ②年齢は18歳から壮年期前半程度、性別は女性の可能性が高い。

謝辞

本遺跡出土人骨の整理作業にあたり、新潟医療福祉大学学生、菊地条太郎氏、佐々木勇人氏、千代初音氏、望月信吾氏の協力を得た。記して深謝の意を表したい。

【参考文献】

- 馬場悠男. 1991. 人体計測法. 人類学講座別巻1, 雄山閣, 東京.
- Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. 1994. Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.
- 藤田恒太郎. 1949. 歯の計測基準について. 人類学雑誌 61: 27-31.
- Martin R. and Saller K. 1957. Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. G. Fischer, Stuttgart.
- Molnar S. 1971. Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American Journal of Physical Anthropology, 34: 175-190.
- Ubelaker D.H. 1999. Human Skeletal Remains, 3rd edition. Taraxacum, Washington DC.
- WHO (World Health Organization). 2013. Oral Health Surveys: Basic Methods. 5th edition. Geneva.
- 山本美代子. 1988. 日本人古人骨永久歯のエナメル質減形成, 人類学雑誌 96: 417-433.